



夢追人VI

かとう学園 宗像市立河東中学校
学校通信第32号(R4. 10. 27)

女子バレー部、宗像区大会第3位、筑前大会へ進出!

10月22日(土)河東中学校体育館等で開催された第39回宗像区中学校新人バレーボール大会で、本校バレー部は第3位となり、筑前地区大会出場が決まりました。

筑前地区中学校新人バレーボール大会は、11月19日(土)に春日中学校と那珂川北中学校の体育館で行われます。引き続きみんなで応援しましょう。

授業研修の風景

岩佐先生の本年度2回目となる研究授業が公開されました。前回の9年生の和菓子づくりに続き、8年生のポスター作成の洗練された授業構成が見られました。

岩佐先生(美術)

河東中の美術の授業のすばらしさは、単に作品制作能力の育成だけでなく、制作までの手順の豊富さときめ細かな段取りや手法の獲得にあります。今回の公開授業では、複数の活動方法の工夫が明らかにされました。



8年2組で行われた美術科の授業。人権ポスターをただつくるのではなく、その前に人権という言葉でイメージマップを作り、アイデアスケッチを考え、さらにグループでふせんを使ってアドバイスをしました。こうしたたくさんの手順を使って作品に挑む岩佐流の授業の公開です。8年2組の生徒のセンスの良さもいたるところで見られました。

秋風に たなびく雲の 絶え間より もれ出づる月の 影のさやけさ

秋風に吹かれて横に流れる雲の途切れたところから、こぼれ出てくる月の光の、なんと澄みきって美しいことだろう。



この歌は百人一首に納められている歌で、作者は藤原顕輔(あきすけ)。

秋の澄みわたった夜空を足早に流れていく細い雲。そのすき間からもれてくる

月光の美しさ。ダークブルーの秋の夜の空と月の光のコントラストが際立っています。「たなびく」や「さやけさ」などの言葉は今ではあまり使われなくなりましたが美しい表現の言葉です。「たなびく」は「横に長くひく」という意味で、「さやけさ」は形容詞「さやけし」を名詞化したもので、「澄みわたってくっきりしている」という意味です。

万葉集が編さんされた奈良時代は、雲ひとつかからないさえぎえとした満月の光が好まれました。しかし、この歌がつくられた平安時代になると、月にかかる雲や雲の途切れた間から差し込む月の光にも美しさを見いだすようになります。『源氏物語』の橋姫の巻には「雲隠れたりつる月のにはかにいと明かく差し出でたれば～」という一文があります。現代語訳すれば「雲に隠れていた月が急にとても明るく差し出てきたので～」となります。奈良時代には雲に邪魔されないはっきりとした静的な月を好んでいたのが、平安時代になると雲に隠れていた月が顔を出し光を放つ瞬間の動的な美を見逃さないようになります。日本人の美意識に対する変化というか深まりを感じますね。

そんなことを考えつつ、この歌を思い出しながら秋の夜空を楽しんでみてください。

今なぜ「美意識」が求められているのか？

～ 山口 周さんが説く「美意識」の必要性 ～

今、世界中の成功している会社の多くが社員教育として美意識を鍛える取り組みをしている。美術館で開催されているアートスクールで学んだり、音楽を学びなおしたりしている。ニューヨークのメトロポリタン美術館やロンドンのテート・ギャラリーなどでは、社会人向けのギャラリートークのプログラムが人気を博している。目的は、「美意識」を養うためだ。

いったいなぜ、名だたる世界の企業の社員が改めて「美意識」を学ぼうとしているのだろうか。

その答えは、現在の会社が新しい商品を開発したり複雑な問題を解決したりするために、これまでの論理的・理性的な考え方だけではうまくいなくなってきたからだ。つまり、現代社会では、論理的な考え方に加えて、直感的・感性的なものがより必要になってきているからだ。直感的・感性的な発想は、美術や音楽などの「美意識」から生まれるということだ。

私が小中学校で受けてきた50年前の教育は、記憶の再生と技術の再現を重視したものだ。いかにたくさんの知識と技術を覚えることができるかが重要だった。だから、入試や定期考査もそれが試されるものだった。なぜなら、当時の企業が求めていたのは、より速く、より正確に同じ製品を大量生産することで利益を上げていたから。20世紀後半の日本製品が、車であれ、家電製品であれ、世界を席卷し莫大なもうけを生み出したのは、同じものを速く大量に作ることで、品質の良い安い製品を生産していたからだ。必然的に、学校教育に求められたのは暗記を中心とした正確で高速の再生能力だった。簡単に言えば、これまでの日本の企業の多くは「人と同じ考え」をもとに「より速く、より安く」市場に提供することで勝ち残ってきたわけで、そのことが学校教育に影響を及ぼしていたということだ。

しかし、現在の世界で求められている製品は、他社と違った差別化があり個性的なものだ。21世紀に入り、大量生産の時代から個別生産の時代へと変化した。そんな中で、「他人と同じ正解を出す」能力に加えて、「人とは違った解答やアイデア」を生み出す能力が求められてきた。それを可能にするのが、「美意識」というわけだ。この状況で、「仕事が忙しくて美術館なんかに行っている暇はないよ」と言うのが日本のビジネスマンだそうだ。ここにGAFAをはじめとした欧米企業に日本が負けだした敗因があるとも言われている。

以上のような考え方は日本を代表するコンサルタントの山口周さんの著書『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか？』を要約し私なりに中学生用にアレンジしたものだ。さらに山口さんは、日本の会社の苦境の大きな原因について次のように述べている。「それは、日本には目標やビジョンが足りないからです。世界をどのように変えたいのか？日本をどのような国にしたいのか？世の中のどんな問題を解決したいのか？こういった問いに対して答えられる日本人がいるのか？どうしてこうなったのか？大きな理由は、戦後の日本には目標やビジョンなど必要なかったからだ。戦後の焼野原から立ち直り、産業を復興するにあたって日本が手本としたのはアメリカ企業だった。アメリカの産業というイメージが視覚的にありありとあった。そして、日本人は高度経済成長をやり遂げた。ところが、この状況は1990年代に入って変わった。日本がトップランナーになってしまったので、後追いすべき標的を失ってしまった。真似する対象がなくなってしまった。それが、失われた30年と言われる平成不況へとつながる。そこで、令和の日本に必要なのが、新たな目標やビジョンです。ここで重要になってくるのが、理性だけでなく感性です。ワクワクし自分も参加したいという「真善美」のある目標でありビジョンです。」

山口さんがこの著書の中で印象深い提案を示している。「私は、今後の社会をより良いものにしていくためには、ごく日常的な日々の営みに対しても、【作品を作っている】という構えで接することが必要ではないかと思っています。私たちの日常的な勉強や仕事という営みが、やがて積み重なって100年後、200年後の世界の姿を作り上げていくことを考えれば、私たち全員が【社会彫刻】であり、であればアーティストとしての自覚と美意識を持って社会に関わるべきだ。」

河東中学校は、山口さんが著書で展開したことを教育の場で実現していると自負している。河東中は、知識・技能の伝授をベースにしなが、思考力や表現力を身に付けさせることを重視している。一方で、体育祭や文化祭では素晴らしいアートを発揮し集団力もつけている。学校教育目標は、「目標をもち、真・善・美を尊び追求して生きる生徒の育成」であり、日常、美意識を追求し鍛えている。河東で育った子どもたちは、きっと将来社会に出てオリジナリティあふれる活躍をすることを確信している。

(参考文献：光文社新書・山口周著『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか？』)

